

天草八十八ヶ所霊場〔歩き遍路〕

天草88ヶ所霊場巡りに、新たに平成27年9月22日、から〔歩き遍路〕がスタートしました。

第一組1番札所の明德寺を朝7時に出発して、明治24年に架け替えられた本町一ノ瀬橋を渡り、下河内の普門院大師堂から、天草四ヶ本寺の東向寺を経て、迦葉寺、天草初代代官鈴木重成公を祀る鈴木神社に参拝しました。更に本町荅北を結ぶ広域農道を山越えして城川原の観音寺、最後は手野の東明寺までの20 Kmを8時間掛けて完歩しました。



白装束に身を固め、菅笠を被り、金剛杖を突いた見慣れぬ遍路姿に人々の視線を感じながら弘法大師へ「南無大師遍照金剛」を唱えての歩き遍路です。

別格松栄山東向寺には、徳川家累代の位牌や鈴木三公の位牌が祀られている。当時は幕府の威光を示し、山門を通る者はたとえ武士でも下馬して徳川家菩提を伏し拝んだと云う。また、山門前の准胝観音堂には夏目漱石が五校の生徒を連れて富岡往還を通る途中立ち寄ったといわれている。



道中、田園の畦道に咲く真っ赤な「曼珠沙華」の花を愛でながら、今なお随所に残っている富岡往還の細道を、鈴木重成公も通ったであろうと往時を偲びながら会話も弾みます。

トンネルに差し掛かると、水戸黄門の主題歌〔ああ人生に涙あり〕の歌が響いてきます。エコー効果も利いてプロ並みの歌声が足の疲れを癒してくれます。

♪人生 楽ありや苦もあるさ 涙のあとには 虹も出る 歩いてゆんだ しっかりと 自分の道を ふみしめて
人生 勇気が必要だ くじけりゃ誰かが 先に行く あとから来たのに 追い越され 泣くのがいやなら さあ歩け
人生 涙と笑顔あり そんなに悪くは ないもんだ なんにもしないで 生きるより 何かを求めて 生きようよ♪

ここしばらく長距離を歩くことなど無かったので体力が続くか心配でしたが、弘法大師の身代わりと言われる金剛杖に支えられ、同行二人の巡礼で完歩出来たのは嬉しかった。



向陽山 明德寺



一ノ瀬橋



普門院大師堂



松栄山 東向寺



霊臺山 迦葉寺



鈴木神社



洞照山 観音寺



石水山 東明寺



境内八十八ヶ所

※ 東向寺に祀られている徳川将軍歴代の位牌

- ①徳川家康（東照宮大権現安国院殿徳蓮社崇譽道和大居士）
- ②徳川秀忠（台徳院殿大相國台靈）
- ③徳川家光（大猷院殿贈正一位大相國台靈）
- ④徳川家綱（厳有院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑤徳川綱吉（常憲院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑥徳川家宣（文昭院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑦徳川家継（有章院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑧徳川吉宗（有徳院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑨徳川家重（惇信院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑩徳川家治（浚明院殿贈正一位大相國公台靈）
- ⑪徳川家斉（文恭院殿贈正一位大相國公台靈）



東向寺に祀られている鈴木三公の位牌

- ①鈴木重成公（等光院殿固峯紹堅大居士）
- ②鈴木正三公（恩心開基鈴木正三大庵主）
- ③鈴木重辰公（異中院殿白英峯大居士）



ろっこんしょうじょう 六根清浄

（天草狂句 鶴田 功著より抄録）

アーンして 昔やアツアツ 今介護
赤い糸 今じゃ額入り 黒リボン
悪業は 因果応報 子に報う
朝晩に 寺の鐘の音 時を告げ
厚かまし 人ん牛蒡で 法事する
天草の 感謝の遍路 皆の衆宗
天草の 今日あるは 鈴木様
尼さんの 結婚式は 教会で
有り難や お大師様の お導き
慌つんな 急一て死んだ者 多かもん
安気なもん どこに行こうが 何食おが
案じるより 団子汁食たが 増じゃった
案ずるな 怪我で済んで 良かったぞ
いい笑顔 煩惱なんの つんぶるて
胡座 お経が済んだら 正座する
医者通い 眠られんちゅうて 昼寝さす
医者通い 達者かとは 口ばかり
戴きます 命戴く 感謝して
稲荷さん 豊年祈願の 神頼み
いやなこつ 来世は二度と 添いません

色褪せた 亡夫の表札 守り神
色褪せた 花の命と 吾が命
怨むより 恩を忘るな 人の道
運の良か 三途の川で 引っ返し
恵比寿顔 心残りは 何もなか
恵比寿さん 埃被って 苦笑い
閻魔の眼 心の奥を 見透かして
延命で 意識なかとに 愚うらしか
老いの一徹 子に従うた まだ早か
大食らい 口に旨かた 腹にや毒
大違い 聞いて極楽 見て地獄
おかしかね 神を信じて テロリズム
おごられたごて我が子にも おごりよる
惜しいこつ 白髪抜き過ぎ 禿なった
お四国の 巡礼地から 砂貰い
遅くとも せんよりはまし 親孝行
鬼火焼き 悪霊払うて カップ酒
お遍路の 心身清め 般若湯
お迎えよ 聞こえん時や お迎えよ
お持てなし 感謝感謝の 巡礼地

親爺居る？ 妻が即答 要リマセン
親看よる 看取られる親 順送り
居らっさん 足腰鍛えて 良し悪し
オレは外 鬼が豆撒く 節分会
おれば邪魔 出掛くれば事故 世話なこつ
おろみぞか 来世も一緒と 猫に言い
恩着せて 受けたご恩は 忘れとる
温泉な 良かばっやっば 我が家の湯
託つけて 三度も叔父を 死なせよる
柏手に 弘法大師の 苦笑い
風邪薬 風引いとれば 効き目無か
がたのきて 骨が鳴りよる古稀古稀と
形見分け 貰うたばって どがんしゅう
合掌し 無病息災 寺詣で
かつとしゅう 貰た年金 薬代
家内留守 卵掛け飯 手間要らず
金なるある 不老の薬 無かもねろ
我慢出やあて 子に残そうて せんちゃよか
我慢我慢 灸の皮切り 次は楽
神構うな 仏放っとけ 祟り無し
神頼み 頼みっぱなし 利益なし
神頼み もっと賽銭 張り込まじゃ
願掛けて 頼んでばかり 利益なし
北枕 迷信じゃるか 良う眠る
気にせんで 紳士トイレは 空いとるよ
寄付集め 渋り面する 門構え
ギフト屋が 母の年期を 知っており
キラ炭を 知る由もなし 烏帽子抗
愚うらしか 延命措置で 生かされて
愚うらしか 魂やうっちゃよき パーになり
薬屋に 卸せる程の 飲み残し
高級車 今度乗るのは 霊柩車
極楽にや どうも行かるる そうに無か
極楽は 信心過ぎて 通り越し
こっでよし 明日死のうが 死ぬまいが
子は巢立ち 夫は冥土 これからよ
これは変 テロや破壊が 聖戦か
三回忌 精進揚げさす 未亡人
叱り付け 説教半ばで 身に覚え
死亡率 百パーセント 気にするな
錫杖に 力ん入る 遍路道
終活も 医者も坊主も 友任せ

精進揚げ よかろうもんと 旅の宿
精霊に 初穂供える 早期米
新茶の香 先ず神仏へ 上げ申そう
新聞の お悔やみ欄に 最後載る
親友に 弔辞頼まれ 先に逝く
末っ子の 孫見るまでは 生きてたい
生命は 潮の満ち引き 神業か
せかせかと 働き尽くめ 後がない
世話要らん ああが先に 逝きなっせ
世話要らん 医者も坊主も 友が居る
世話焼あて 娘が時にや 来て呉るる
線 ピッピッ終に 長いピー
先達の 遍路指南に 絆されて
そうりゃウソ 美人薄命 私や九十
そうりゃ見ろ 親のしたごつ 子のしよる
袖の下 地獄の沙汰に 効くどうか
そりゃでけん 親は看らんで 遺産分け
ダイエット 七福神に 勧めらす
大丈夫 七福神な みなメタボ
出し惜しみ 漉ためたっちゃ ちょろっと出
出すものは 舌出すとでも イヤちゅわす
脱オンナ 男子トイレに 駆け込ます
達者かね 何処もどがんも 無かちゅわす
達者かね まだ口だけは 負けとらん
魂消った 術後間も無う 巡礼に
近まって 般若心経 習いよる
近まって 迎えが来ても 断れぞ
近うなった あの世も寺も 小便も
椿落つ 母の臨終 かも知れん
椿落つ 不吉な予感 なまんだぶ
妻の居て 生き存える 有り難さ
つんのうで お寺詣りに きゃあ行こだ
程度もん 薬も過ぎれば 毒になる
寺普請 寄付て聞いたら 寄付かん
寺詣り 年寄りばかり つんなもだ
手を合わせ 捨てる物にも 感謝して
歳も歳 医者と仲良う なるばかり
何様か 柏手じゃるか 合掌か
南無大師 同行二人で 遍路する
何しゅうに 黄泉で使えん 銭貯めて
何も彼も 為い得んこつあ 神頼み
賑やかさ 柏手響く 初詣

にちぼつ 日没に 八十八の 遍路終え
似れば似る 五百羅漢に 俺の顔
抜け出せん 淡島さんの 薄笑い
願わくは 感謝の心と 佛心と
のさつとる 女ばかりか 苦勞にも
はげだこ 半夏団子で 荒神さまに お持て成し
はげ 励まそう 坊さん將に 修行中
はつもち 初詣で 今年や宮ば 替えてみゆ
初詣で 二千元がと 拝ん申す
火の伽と 仏壇の花 切らすまい
ぼんのう 百八の 煩惱払う 除夜の鐘
百薬の 長と言えども 過ぎりや毒
病院を あちこち替えち きゃあ死んだ
遍路さん 暑か時どま 麦般若
坊さんの 引くに引けない 後ろ髪
ほこり 埃かぶって 阿弥陀如来が お気の毒
ほ 誉めちぎ 値切る魂胆 恵比寿市
ほんこん 盆殿にや 先祖様への お持て成し

めしまえ 飯前に 下げて頂く 御仏飯
ほうちよう 目の合うて どうも包丁 入れにつか
もう嫌 来世は他人夫が良か
ちよつと もう一寸 まあだ納骨 しとうなか
のうこつ 戻られん あの世はそうにや よか処
ところ やおいかん 娑婆の荒波い きゃ一飲まれ
さそ 矢印に 誘われて行く 遍路道
休もうか どうぞお先に 安らかに
と 良う穫れた 地の神様に 上げ申う
よだれ 涎繰り 牡丹餅いお経 上げよらす
ほ た も ち 世は様々 テロや戦が 聖戦か
い く さ 楽しゅうだ 一番楽は 棺のなか
せいせん 利益なか ありもころもと 頼み過ぎ
ろうそく 蠟燭は 我が身を減らし 人照らす
しよつじよう 六根の 清浄なれば 存えて
ながら 忘れとる 先祖供養も 墓花も
くよう 己だイヤばい 先に逝くとも 残つとも